

いつもお世話になっております。

今月分の請求書を送付いたしますので、何卒ご査収の程よろしくお願い申し上げます。

いつもありがとうございます。

新緑と太陽の光がまぶしい季節になりました。皆さまはいかがお過ごしでしょうか。

アンティークローズを育てている友人が、毎年この時期になるとすばらしいバラの写真を見せてくれます。お花屋さんでよく見かける様な鮮やかな色ではなく、彩度が低めの色合いや、淡い色合いのバラが特に好きな様です。苗を買うときには、名前に魅かれて買うことが多いのだそうです。オンディーヌ（水の精という意味）、ライラ（夜を司る天使の名）、アルテミス（月の女神）・・・と、詩的でロマンチックな名前ですが、その名に遜色のない美しい花が咲いています。

いつも SNS を通じてお互いの近況を報告しあっており、ここ数年は会っていないのですが、バラの写真をみると彼女自身の雰囲気にとっても似ていて、彼女の姿が目には浮かぶようです。

ペットが飼い主に似るのと同じ法則なのか、または、「類は友を呼ぶ」で自分に似たようなものを選んでしまうのか・・・。バラはとても繊細な植物で、枝の剪定や植え替えや肥料を細やかに配慮しなければならないというイメージがあります。手がかかる分、世話をする人の人柄がのり移るのかもしれないね。

男性が女性にプレゼントする花の代名詞の様なバラですが、つぼみや葉や棘、色や本数によっても花言葉が違うそうです。でも、花言葉を知っている人同士ならいいけれど、相手が無頓着だと伝わらないですよね・・・。

かといって、「このバラの花言葉は〇〇だよ」なんて、知ったかぶりして説明してしまうと、ムード半減ですし、贈った方は何気なく選んだのに、貰った方が花言葉を調べてしまって、誤解が生まれることもありそうです。

そもそも花言葉なんて誰が決めるのでしょうか？業界のキャンペーンなのでしょうか？・・・花言葉の起源は1600年代のコンスタンチノーブル（イスタンブール）で、1717年イギリスのコンスタンティノーブル駐在大使夫人によって、ヨーロッパに紹介されました。その後1819年頃フランスで発表された『Le Langage des Fleurs』（花々の言葉）という本は1850年ころまで流行し、欧米諸国にひろまったそうです。日本には明治初期に伝わったとされています。世界各国で地域柄・宗教・伝説・言い伝え等から引用されているので、国によって花言葉も違うそうです。

花言葉ブームが起こった頃のフランスが、どんな時代だったのか気になります。1789年フランス革命、1793年マリーアントワネットの処刑、1804年ナポレオンが皇帝となり、1815年にはセントヘレナ島に幽閉・・・どうやら重々しい時代だったようです。

自由・平等の考えを持ち始めた民衆は、国王や貴族などの特権階級が市民階級を支配する政治体制に抵抗し、1848年2月革命でヨーロッパは大きな歴史上の転換点を迎えたそうです。そんな激動のフランスで花言葉が大ブームになったことは、抑圧された市民の中にあつた自由で豊かな心が次々に花を開いた象徴で、歴史転換の一助になったようにも感じました。

最近蒸し暑く、ランチで外に出ると汗をかくようになりました。さわやかな5月はどこへ行ってしまったのでしょうか。皆さまも、どうぞご自愛くださいませ。

本社周辺の沿道も
バラが花盛りです！

